

平成21・22年度 大学院派遣研修 研修報告（概要）

金沢大学大学院教育学研究科
教育実践高度化専攻カリキュラム研究コース
七尾市立田鶴浜小学校 教諭 田中 利弘

研究主題

自ら調べて、問題解決に取り組む子を育てる社会科指導法の工夫 ～言語化の活動を取り入れた実践を通して～

要約： 児童が自ら意欲的に追求していくためには、魅力的な教材を用意することが必要である。児童が社会的事象を自分のこととしてとらえ、意外でストーリーのある授業で社会認識を深められるような教材を開発した。さらに、自らの見方・考え方を確かなものにしていく学習過程のあり方として、3つの言語化のステップを取り入れた授業を実践した。

本研究は、自ら調べて問題解決に取り組む子を育てるために、言語化の活動を取り入れて交流し合う活動を取り入れることが効果的であるか、実践を通して明らかにした。

キーワード： 意外性、ストーリー、資料、言語化のステップ、関連図、交流活動

I はじめに

今後も激しい変化が予想される現代の社会において、子どもたちは様々な課題に出会い、それらを自分なりに解決しながら生きていかなければならない。これからの社会科教育においては、問題解決的な学習や体験的な学習、学び方や調べ方を身につける学習を一層重視していく必要がある。問題解決的な学習においても、学習問題の設定や、資料の効果的な活用、社会的事象に対する意味づけなどで課題が見られる。これらの学習を行っていくためには、社会的な思考力や判断力が大変重要になる。しかし、社会的事象の意味について考える活動が意図的に組み入れられていない実践が多く、子どもたちの思考力・判断力が十分に育成されていないのが現状である。

社会科は、これからの社会の変化に自ら対応できる能力や態度を育成していく上で重要な役割を担っているが、諸調査から社会科の学力実態における課題が報告されている。国や石川県の学力調査結果からは、問題解決のために用いる資料を読み取ることや社会的事象相互の関連を把握することに課題があり「資料を効果的に活用し、理解や思考を深める指導がさらに必要である。」と指摘されている。（平成21年度「基礎学力調査」－分析・考察－）

II 研究主題・副題の設定

2003年に国立教育政策研究所教育課程研究センターが実施した「平成15年度小・中学

校教育課程実施状況調査」の調査結果について、「調べる活動」や「考える活動」を苦手としている子どもが多い。

「調べる活動」では、調べるための資料が難しく感じ、自分では調べられなかったり、何をどのように調べればよいのか分からなかったりする子どももいる。「考える活動」では、何について考えればよいのか分からなかったり、自分の考えに自信を持たず、積極的に話し合いに参加できなかったりする子どもがいる。

社会科学学習において、自ら考えを深めるためには、事実の読み取りと児童どうしの交流活動を取り入れた多面的な追求活動を行い、それらの事実に知識を比較したり、関連づけたりすることにより思考が深まるであろうと考え、本研究の主題とした。また、思考を深める際に必要になってくるのが、言語の役割であり書き表す活動を重視し、副題を設定した。

III 研究の目的

本実践では、思考における言語の果たす役割に着目して、資料を確実に読み取り、思考を深めるための手だてとして、資料を言語化する活動を取り入れた授業実践を行ってみる。

実践授業によって、以下に示した研究仮説を検証することを目的とする。

魅力的な教材を開発し、社会的事象を関連づけることによって、授業が分かるようになり、社会科を意欲的に学ぶであろう。

IV 研究の方法

- ①「意外」と「ストーリー性」のある授業を開発するために教材研究を行う。
- ②授業で言語化のステップを取り入れ関連図を作成し、思考の深化を行う。
- ③5年生、6年生の4単元で実践授業に取り組み、児童の様子や関連図、アンケート調査結果を分析し、研究仮説の検証を行う。

V 研究の実際

1. 本校児童の意識調査にもとづく課題

社会に対する意識や学習への取り組み方、学習と日常生活とのつながり意識を把握するため5、6年生を対象にアンケート調査を実施した。

その結果、国の調査と同様な傾向が見られ、課題が浮かび上がった。(図表1)

図表1 本校児童の意識調査にもとづく課題

- ・見学活動は好んでいるが、社会科の学びが楽しいと感じていないのではないかな。
- ・何をどのように調べればよいのか、分からなかったりするのではないかな。
- ・考える活動では、積極的に話し合いに参加できないのではないかな。

2. 研究の視点と授業の進め方

仮説の検証を進めるために、次のような手だてを考えて実践した。

◇課題解決の楽しさが実感できるような学習の支援

- ・児童にとって、追求意欲のわくような教材を用意する。
- ・たくさかの情報が得られる教材開発。
- ・生活とつながりが実感できるような教材と場の設定

◇言語活動の充実～3つの言語化のステップ～

◆【言語化①—イメージの明確化】

資料に含まれるイメージ的な情報、今まで学習したことや経験したことなど、形がないものを書き表すことにより、思考内容を可視化する。

◆【言語化②—事象の関連づけ】

書き表した言語情報の意味に着目し、個々の事象を関連づけて、意味にまとまりのある概念をつくり出す。

◆【言語化③—思考の深化】

複数の概念をもとにして、学習内容を総合的に見ることによって、社会的事象の背景や本質に迫りながら、筋道を立てた深い思考を行う。

◇言語化の過程で、関連図を取り入れる意義

関連図で表すことにより、言語化した概念や考え方を構造的にとらえ、視覚的に表現することで、事象間の関連を一目で把握できるとともに、事実在即して思考を深めることを促進できると考えた。

3. 実際の授業

《実践授業Ⅰ：第5学年》

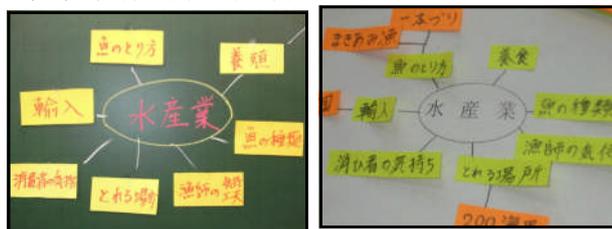
【単元名】水産業のさかんな枕崎市

◇課題を追求する場面

(1) 学習意欲のわく教材

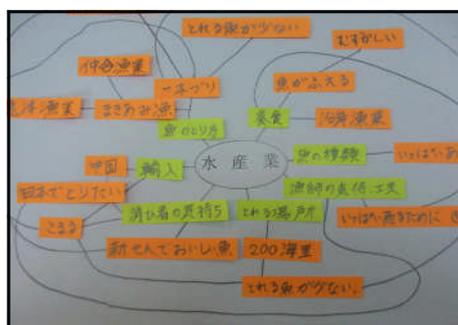
水産業の導入として、「江戸前寿司一人前」から入った。子どもだけでなく大人にも人気の寿司ネタと言えば、マグロである。教材としてマグロを取りあげた。世界一マグロを食べる日本人だが、「これからマグロが食べれなくなるのではないかな？」という、追求意欲のわく課題を設定した。世界的に見て、マグロの需要が高まりを見せる中、安定して供給を続けるには、養食しかない。32年間かけて、日本で完全マグロ養食に果敢に挑戦した、近畿大学水産学部の取り組みについても紹介した。

(2) 言語活動の実践



児童は、資料を隅々まで見て気づいたことや分かったことを、できるだけ短い言葉で多くの情報を書き出す姿が見られた。支援として、考えのまとまらない児童は、視点を示して思考を促した。

(3) 実践授業Ⅰから見てきたこと



養殖業や栽培漁業などの「つくり育てる漁業」を中心に、追求活動を行った。

それらを調べていく中で、水産業で働く人々の様々な工夫にふれることができ、自分の知らなかった水産業について、多くの発見をすることができた。嫌いだと思っていた児童も、社会科に少し興味を持っているようだった。

4. 《実践授業Ⅱ：第5学年》

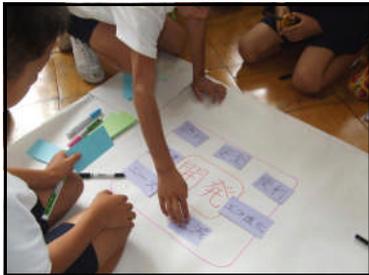
【単元名】自動車をつくる工業

◇課題を追求する場面

(1) 学習意欲のわく教材

自動車は、各家庭に1台以上ある時代になった。色、形、デザイン等様々である。どうして、こんなにあるのだろうか。それは、消費者のニーズがあるということ。また、トヨタは世界の生産量である。トヨタが強いのは、何か訳があるのではないか。そこで、トヨタの生産ラインからその秘密を探っていた。さらに、これからの自動車の主力になるであろう、電気自動車についても追求活動を行った。

(2) 言語活動の実践



調べた内容を交流することにより、自分が調べたことを他の人へ伝えるとともに、自分が調べられていない内容については、もう一度資料

を見直す姿が見られた。交流の様子を記録して、子どもたちの学習状況をつかみ、次の段階である関連づけをする際の指導に生かすことができた。

(3) 実践授業Ⅱから見えてきたこと



発表内容を他の人に分かりやすく伝えるために、説明部分をグループで作成した。関連図で指し示し根拠となる資料を示し

ながら、グループで考えたことを発表した。児童も自分の調べたいことを教科書、資料集、図書、インターネット、インタビューなどを通してまとめられた。

5. 《実践授業Ⅲ：第6学年》

【単元名】明治維新をつくりあげた人々

(1) 学習意欲のわく教材

5年生の産業学習と違って、教材提示に工夫が必要である。歴史学習では、写真、風刺画、年表等が、児童の学習意欲につながる。「江戸時代末頃の日本橋近くの様子（江戸、1860年頃）と資料「明治時代初めの日本橋近くの様子（東京、1880年ごろ）」を比較しながら、分かった情報を書き出した。さらに、ペリーの肖像画を通して、当時の様子を想像させ、どのような

影響があったのか追求させていった。

(2) 言語活動の実践

児童がまとめた文章から、明治時代を概観する考えが表れている部分が見られた。（図表2）

図表2 児童の学習後のふり返り

- ・日本の政治や社会のしくみ、外国との関係が大きく変わったなと思い、人々の生活や文化も変わったということが分かりました。今の日本に生かせていると思いました。
- ・明治時代に起こった出来事は、全部身分制度に関わるんじゃないかなと思いました。

(3) 実践授業Ⅲから見えてきたこと

言語活動を通して、記述した内容から自分の感想が多く見られた。（図表3）

図表3 自由記述のふり返り

- ・西洋風の文化は当時の日本人には、きっと新しいものばかりなのでとても驚いたと思います。
- ・自由民権運動が広がり、板垣退助は政府のものだけが政治を進めるのではなく、国民の意見を聞くべきだという考え方があるということが分かりました。

6. 《実践授業Ⅳ：第6学年》

【単元名】世界に歩み出した日本

◇課題を追求する場面

(1) 学習意欲のわく教材

ノルマントン号事件の風刺画、ビデオを使用し、様子から事件の裁判の結果について考えてもらった。不平等な条約を何とかしたい、という追求意欲を持たせた。当時の日本は外国から低く見られていたことを風刺画でとらえた。日清・日露戦争の勝利を、4コママンガで視聴覚教材を作成し意欲的に問題解決をしてもらった。

(2) 言語活動の実践

ノルマントン号の船長の裁判結果について、有罪か無罪かの立場に立って、その理由を考えた。また、日清・日露戦争では、2つの戦争の勝利で一流の国になったと思うか思わないかの立場で理由を考えた。

(3) 実践授業Ⅳから見えてきたこと



発表者は、自分の考えの根拠を、関連図年表で示しながら、グループの他の人に発表する姿が見られた。提示しながら発表

することにより、聞き手が発表者の考えを把握しやすかったと考える。

VI 研究の成果と課題

◇成果について

研究仮説の検証として、魅力的な教材を開発し、社会的事象を関連づけすることによって、授業が分かるようになる手だてを講じた。そのような実践を展開してきた結果、以下のことが明らかになった。

(1) 言語化する活動での子どもたちの変容

ア. 【言語化①—イメージの明確化】の場面

- ・資料が持つ情報を短く言語情報として表すことにより、「漏れなく」、「無駄なく」、「重なることなく」、思考を深めるための多くの事実的知識を読み取る姿が見られた。
- ・様々な資料から多面的に事実的知識を読み取る姿が見られた。
- ・資料が持つ情報を書き出すことにより、疑問に思う部分が明らかになり、それらの疑問点を集約することで、学級や個人の学習問題の設定を行う姿が見られた。

イ. 【言語化②—事象の関連づけ】の場面

- ・視覚的に各事象を操作し、容易に事象間の関連をつかむ姿が見られた。
- ・関連図を使って、子どもたち自ら主体的に事象間の関連づけを行う姿が見られた。
- ・グループで関連図の活動を取り入れることにより、関連づけをより確かにする姿が見られた。

ウ. 【言語化③—思考の深化】の場面

- ・他の人が調べた内容を踏まえて、思考を深める姿が見られた。
- ・思考内容を言語化することにより、自分の思考の段階を把握し、さらに思考を深めようとする姿が見られたことである。

(2) 指導者から見た言語化の活動

4つの実践授業の中で、言語活動を取り入れてきた。実践授業を通して、感じられたことを以下に示す。

ア. 【言語化①—イメージの明確化】について

- ・知識の有無に関わらず、同じ活動からスタートでき、全員が授業に参加できていた。
- ・資料の読み取りがスムーズになった。
- ・1人1人の資料に対する見方が変わった。

イ. 【言語化②—事象の関連づけ】について

- ・関連図年表を作成する過程で、事象間のつながりを意識できた。
- ・関連図を作成したことで、人々の生活がつながっていることを、実感する子どもが多く見られた。
- ・知識・理解面が定着できた。

ウ. 【言語化③—思考の深化】について

- ・子ども自身も自分の学習の程度が高まっていくことを実感できていた。
- ・言語化の活動や関連図年表の作成により、つまづきをつかみやすく、間違っているところへの支援がしやすかった。

言語化の活動を通して、子どもたちが一番変容したのが、「文を書くことへの抵抗が無くなり、社会科だけでなく他の教科でも自信をもって文章化することができるようになった」ことがあげられる。言語化の活動が、考えの文章化を促進したことの表れであると考えられる。

◇課題について

本研究の関連図を実践授業で取り組んだことにより、前述のような成果は見られたものの、以下のような課題となる点も明らかになった。

(1) 資料を言語化する活動における課題

ア. 【言語化①—イメージの明確化】の場面

- ・資料の読み取りに課題のある子どもには、資料を見る視点をつかむことができるような支援が必要であるのではないかと考える。

イ. 【言語化②—事象の関連づけ】の場面

- ・事象間の関連性を見いだすには、学習プリントの形式や活用方法、ノートへの記録方法を工夫し、子どもたち自ら調べたことを整理し、各事象の言葉の意味を振り返ることができるような方法が必要だったのではないかと考える。

ウ. 【言語化③—思考の深化】の場面

- ・事実を根拠にした考えを作り出すことはできたが、社会的事象に対して考えを深めることまでは至らなかったのではないかと考える。

(2) 今後の課題

児童が主体的に追求する意欲がわくような問題解決的な学習の充実が必要である。教師が進める授業でも言語化はある程度の効果が考えられる。しかし、子どもたちが思考を深める際、教師から与えられた課題では、その追求意欲が途切れてしまう可能性が考えられる。また、児童たちが追求したいと思う学習問題を自分で設定しなければ、思考の深まりは浅いものになってしまうと考えられる。

本研究では、4つの実践において進めてきた。今後は、社会科授業のおもしろさの本質である「意外性」と「ストーリー性」に着目し、児童の追求意欲のわく教材（歴史教材を含めて）開発をさらに進めていきたい。

言語化の活動についても、課題が明らかとなった、支援の方法についても研究していきたい。